

# “多度津”に思いを込めて

多度津町立多度津中学校吹奏楽部 顧問 大平 寿

## ●第1作目「桜花舞う」～はるか津を望みて幾度となく咲き誇る花、多き夢をのせて～ 多度津町花の「桜」をテーマ (平成24年度)

曲名の「桜花舞う」の「桜花」とは、多度津の町花である「桜」である。その代表的な場所として、多度津山の桃陵公園に咲き誇る桜は、県下に誇る多度津の名所の一つである。サブタイトルの～はるか津を望みて幾度となく咲き誇る花、多き夢をのせて～の中に、「多度津」の言葉を入れさせていただいた。2010年多度津町は町制120周年を迎えた。その記念すべき節目を越えた多度津町、そして、私自身、多度津中学校にお世話になるご縁からも「多度津」への思いもこの曲に込めさせていただいた。

## ●第2作目「黎明の鼓動」 近代産業の発祥地である多度津町をテーマ (平成25年度)

「黎明」とは“新しい事柄が始まろうとすること”、  
「鼓動」とは“気持ちや物が震え動くこと。または、震わし動かすこと”  
多度津町は、古くから良港の恩恵を受け、江戸時代には、瀬戸内海の物流集積地や金毘羅参詣の上陸港として賑わい、さぬき一の港町へと発展してきり。明治以降は、四国初の鉄道開通や県内初の私立銀行設立など、四国の近代産業発祥地としてもリードしてきた。また、少林寺拳法発祥の地でもある。このように多度津町は重要な発祥の地であり、県内外において多くのことを発信してきた。まさに、新たなものが始まっていく「黎明」の地である。多度津町に誇りをもって、「黎明」のごとく多中吹をさらに発展させていく決意をもつてほしいと願う。その強き思いは「鼓動」のごとく、自分たちの心の中で震え動き、周りへと震わし動かすものとなるであろう。そのような思いから曲名を「黎明の鼓動」とした。「黎明の鼓動」とは、ふるさと多度津町で頑張る私たち多中吹そのものである。

## ●第3作目 吹奏楽のための序章「専心の光」 多度津中学校新校舎を記念 (平成26年度)

「専心の光」は多度津中学校の平成8年度卒業記念のモニュメントの言葉であった。旧校舎時代には、数多くのすばらしい卒業記念の碑や言葉が残されていた。本校を卒業した先輩たちが後輩たちに贈った本校への思いと願いである。私はその中でも旧体育館に北側の壁に掲げられている「専心の光」に惹かれた。「専心」とは、「他に心を動かさず、ひたすら一つのことに集中すること。一つのことに心を注ぐこと」である。その「専心」の心を「光」のごとく貫き通すことが大切であると思う。長い人生を歩んでいく者へ生涯のモットーとしても胸にひめておきたい励ましの言葉であるかのようにも感じる。平成27年度に完成する新校舎に思いを込めて作曲した。今までのよき伝統を受け継ぎ、「専心の光」のごとく躍進するものと確信している。

## ●第4作目 吹奏楽のための抒情詩「望郷の地、永遠に」 箏曲「多度津の唄」[平成26年度多度津中学校2年団の作曲]をもとにふるさと多度津に寄せる (平成27年度)

\*平成26年11月6日(木)香中音研多度津大会にて、第2学年で箏の創作活動の研究授業を行った。「ふるさと大好き!」と題し、題材として生徒たちがふるさと多度津をイメージして考えた旋律をもとに編曲した箏曲「多度津の唄」を用いた。

「望郷」とは、「ふるさとを懐かしく思いやること」である。「望郷の地」とは、まさに多度津町のことであり、ふるさと多度津の地に生まれ育ったことに感謝と誇りを持ち、大人になってもふるさと・郷土を愛する心を持ち続けてほしい願いを込め、曲名を「望郷の地、永遠に」とした。  
第1・第2作目でも取り上げたように、「桜」や「近代産業の発祥地」など、多度津町は、自然や名所、歴史などすばらしいものばかりである。「望郷の地」のテーマのもととなっている箏曲「多度津の唄」の旋律の流れにのって、我が町、多度津町を振り返り、その地で生まれ育ったことに誇りをもって生きていってほしいと強く思う。

## ●第5作目 「蒼天の如く」～吹奏楽のために～ 多度津 TA-DO-TSU の音群 (A-D-Eb) からイメージ、未来の多度津への思い (平成28年度)

多度津TA-DO-TSUからの音群 (A-D-Eb) をモチーフにした。その音群のイメージから、多度津山から望む風情ある町並みを包み込むかのような青々とした瀬戸内海や蒼く広がる空の素晴らしい景観が思い浮かんだ。城下町や港町、近代産業の発祥地として発展してきた多度津の歩み、そしてこれからの未来永劫への思いを膨らませ、蒼天(「蒼天」の意味:青空、春の空、天の造物主)のように広がり続け、未来へと思いをつないでいくことを思い描いて作曲した。多度津への思いが、このモ

テーマを通して伝えたいと思う。

●第6作目 「色舞奏魂」～吹奏楽のために～ (平成29年度)  
伝統を受け継ぐ多度津の方々の心意気 (多度津魂)

曲名の「色舞奏魂」の言葉には、多度津の方々の心意気の魂が、躍動的な舞、ふるさとを思う哀愁的な奏と色彩豊かに織りなす思いがある。いにしへの時代から大切に育まれてきた多度津の方々の心意気(多度津魂)をこれからも大切に受け継いでほしい願いである。古くから城下町や港町、近代産業の発祥地として発展してきた多度津の歩みの中、獅子舞や神楽など受け継がれてきた郷土芸能、桜祭り、夏祭りなど地域行事など、多度津には数々のすばらしい伝統がある。その根底には多度津の方々の熱い思いがある。私はその思いに深く共感する。私たち多度津中学校もすばらしい伝統がある。運動会での「多中ソーラン」である。毎年、創意工夫ある「多中ソーラン」を多中魂をもって披露している。多度津町歌(堀沢周安作詞・末沢信夫作曲：明治時代に作られた町歌。昭和8年に発行された多度津町観光案内パンフレットにも掲載されている。)の歌詞2番に「多度津人」とある。そこから本作曲の多度津魂をテーマにするきっかけともなった。

●第7作目 「波濤の津」吹奏楽のために～「多度津の湊 参詣船入津の図」に寄せて～ (平成30年度)  
天保の築港による多度津の発展の歴史

「波濤」とは「大波」、「津」とは、湊(港)のことである。天保の築港により波濤に対しても構えのよい四国随一の多度津の港が作られた。古くから讃岐の交易、金毘羅参りの信仰の対象の玄関口として多度津の町が栄えた。その隆盛の礎は、多度津の方々の活気や人情、そして人と人との深いつながり合いがあつてこそだと思ふ。これからも波濤の如く多度津の町が未来に向かって、大きい波のうねりのように発展してほしい願いを込めた。

●第8作目 「天空の城郭」吹奏楽のために～「天霧城と本台山城 多度津の城下」に寄せて～ (令和元年度)  
室町時代の200年間、城下町として栄えた多度津の歴史

前作の「参詣船入津の図」天保の築港による多度津の発展の歴史に引き続き、室町時代に香川氏が約200年間この地を城下町として多度津を発展させてきた歴史に寄せて作曲した。「天空の城郭」とは、天霧山の天霧城と多度津山の本台山城をイメージしている。ともに山に構築された城である。この城が長きに渡り、城下町として多度津を発展させてきた思いを込めた。

●第9作目 「賀富羅津」吹奏楽のために～「大和・古墳時代の多度津の湊」に寄せて～ (令和2年度)  
大和・古墳時代、多度津の発展の原点となる港への想い

多度津の大和・古墳時代には、御産盃山古墳をはじめ、多くの古墳があり、その中心として弘田川の河口には、海の交流の基点となった「賀富羅津」と呼ばれる港があるのではないかとされている。そして、その港が人々の豊かな暮らしを支え、後世の多度津の発展と繋がっていったのではないかとされる。2年前に「波濤の津」で描いた江戸時代の多度津の港の歴史よりも以前にあったとされる港「賀富羅津」に想いを寄せて作曲した。多度津の発展の原点となる港への想いを込める。

●第10作目 「七福神」～黎明の時を越え～ 多度津町町制施行130周年記念に寄せて  
港の発展とともにある素晴らしい多度津の歴史を胸に、全ての多度津の方々に贈る賛歌 (令和3年度)

多度津の素晴らしい歴史は、港の発展にあるといっても過言ではない。古墳時代の賀富羅津と呼ばれる港、室町時代の細川家家臣香川氏の拠点港、江戸時代の多度津京極藩としての天保の築港と、多度津は港とともに発展してきた。そして、幕末から明治にかけては、廻船業に従事した商人の中に「多度津七福神」と呼ばれる豪商が現れ、さらなる港の発展とともに、多度津を近代化させてきた。まさに「黎明の時を超え」る歴史の数々である。「七福神」とは「福をもたらすとして日本で信仰されている七柱の神」である。曲名の「七福神」には、港を中心に発展し、多くの人々で創り上げてきた多度津の歴史を通して、多度津のすべての方々が「七福神」の心意気で、これからも未来永劫に渡って多度津の誇り高き発展を願う気持ちを込めた。多度津町は、令和元年に、日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」に追加認定された。そして、令和2年には、多度津町町制施行130周年を迎えた。その輝かしい歴史を祝し、「賀富羅津」、「波濤の津」で描いてきた「港」への想いを根底に、多度津への思いを馳せる。